

目次

巻頭言・他者の想像、環境への気づき	1
■投稿 続・コロナ禍にて～パンデミックから約12ヶ月～	
2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9	
研究ノート 京都美術工芸大学大学院	10, 11, 12, 13, 14, 15
EDplace91号 卒業制作特集 作品募集	16
事務局報告	16
編集後記	16

発行日＝令和3年3月3日

発行人＝

山内貴博 yamauchi-t@g.kyobi.ac.jp

編集＝

上綱久美子 tandk@sepia.ocn.ne.jp

小泉雅子 koizumim@tamabi.ac.jp

佐々木美貴 mikisan@blue.ocn.ne.jp

山内貴博 yamauchi-t@g.kyobi.ac.jp

◆日本デザイン学会環境デザイン部会事務局

〒605-0991 京都市東山区川端通七条上ル

京都美術工芸大学 工芸学部建築学科

山内研究室気付

TEL 075-525-1515 FAX 075-533-6033

Mail 平松早苗 jssd-ed_hira@mbr.nifty.com

巻頭言

他者の想像、環境への気づき

森山貴之（横浜美術大学）

この1～2年、子ども（幼児）の目線で身の回りのものを見る機会が増えました。また夫婦ともに教育、福祉系の組織に属していることもあって、その知見の交換を通じて考えさせられることも多く、試行と反省の毎日を過ごしています。

ところで、全ての人間には様々な個性差があり、時に不均衡が生まれてしまいます。それゆえ例えば教育の場においては、その不均衡を是正するための「合理的配慮」、つまり細やかなコミュニケーションを経た適切な技術的対応が求められるわけですが、とりわけその前段としての個々の学生に対する想像力と気づきの重要性について、日々痛切に感じています。多様な学生がひとつの環境で過ごすなか、いま目の前にいる学生についてどれだけ想像力を駆使して真摯に理解し、不均衡に気づき、それを取りはらうための手段

を講じられるか。しかし一方で、そもそも自分はこの学生を理解することなんてできるのか、気づいたつもりになっているだけで、その勝手な想像のもとに解決法を押し付けているだけではないのかと葛藤することも多々あります。

そんなことを考えつつ、いち子連れ都市生活者として生活環境をみまると、そのコスト重視で最大公約数的に配慮されたデザインに、とても腹を立てています。やたらとある段差や階段、ものすごく迂回させるEVホールは、抱っこをせがむ子どもとベビーカーとたくさんの荷物を抱えた親にとって格好の筋トレです。坂道では、自動車や勢よく自転車で降ってくる若者が見えるたび、あわてて子どもを道路脇に寄せなければならぬ。踏切では、電車を見ている子どもがいつ遮断機をくぐらないかと、その襟首

をつかむ手にも力が入ります。他にも、住宅街のそこかしこに放置される植木鉢には錆びて折れてしまった園芸支柱が刺さったままだし、児童公園にある遊具の年齢制限ステッカーは確認されることもなく、あらゆる年齢の子どもたちが群がっています。パパネックではないですが、そのデザイン上の選択は正しかったのかと問うてしまいます。

とはいえ、例えば階段などでは一緒にベビーカーを運んでくれる人がいるし、道を駆け出す子どもに声かけをしてくれる親切な方もいます。公園では他の親御さんも子どもを見守ってくれます。そうした光景に出会うたび、子どもたちへの意識が共有されていることを感じ、やはり想像と気づきが環境を支えているのだとひとり安心していきます。

しかし、こうした環境への意識、その想像と気づきの重要性を再認識できたのは、特集号の編集に携わせていただき、執筆者の皆様のご研究に接することができたからに他なりません。ここにあらためてお礼申し上げます。

「続・コロナ禍にて ～パンデミックから約12ヶ月～」

新型コロナウイルス（COVID-19）のパンデミックから1年が経ちました。1年というとざっくりですが、12ヶ月と言いつと換えると、もう少し生活に寄り添った時間的視点になる様に思います。みなさまはこの12ヶ月をどの様にみられているでしょうか？前号の「コロナ禍にて」に引き続き、投稿企画をしてみました。4名の方からご投稿いただきましたので紹介します。

前号の山田弘和先生作成の『「新しい生活様式」と環境デザインについて』は、COVID-19のパンデミックを受けて求められる新しい生活様式への変容と環境デザインについての大変興味深いアンケートでした。本部会会員54名のうち23名からのご回答をいただきました（回収率約43%）。みなさまのアンケートご協力を感謝申し上げます。【編集部】

大学の地域性は
これからどうあるべきだろうか
伊藤真市（宮城大学）

地域との繋がり深い地方大学にとって、武漢コロナウイルスにより学生を地域社会に送り出せなくなったのは痛手であった。地方の公立大学の特徴として、卒業生が地元に住んでいるケースが結構多い。それら卒業生達と連携して成果をあげてきたのだが、武漢コロナウイルスにより、そうした機会そのものが失われたのである。それは、学生にとっても、卒業生にとっても、地域にとっても、大きな損失となった。

デザインの学習は、学内で閉じていると、誤った自己表現に陥る危険がある。クライアントの存在、社会がどう受け止め受け入れるかという問題、これらについて、実践的な場を適切に設定することでその危険を回避してきた。だが、武漢コロナ以降は、大学周辺の地域で活動する団体のチラシやポスター、Webサイトの制作といったものにとどまっている（その数も激減した）。以前には、廃校の小学校で活動する福祉団体を核として地域を支援し、大規模なイベントをプロデュースし、数年後には地元で自立して実施できるまでにしたこともあったが、そうしたものはほど遠いものである。

一般的な授業に関しては、設計・デザイン系の教員は、こと講義に関しては、問題の発生はみてとれなかった。むしろ、様々な工夫で新たな教育の仕方を模索し楽しむ気持ちが高かったようだ。私も自ら撮影する動画の作成を行った。それを事前に見るよう指定し、リアルタイムでのリモートの講義でまとめを行い、グループ分けしてディスカッションをしてもらった。また（これは私の友人の試みだが）、スマホのみで通信環境も悪い学生が多数を占める文系の大学でのデザインの講義に対して、スマホの横使い画面に対応するpdf教材を提供し小課題を出していた。事前の動画やスマホ対応pdf教材での学習は、自分のペースで学べる点が学生にとって好まれたようだ。演習や卒業研究においても学生間の交流は少なくな

たものの、リモートによる可能性を感じることができた。（とはいえ、抜け落ちたものも少なくない。）

武漢コロナ後の大学教育はどのようなのだろうか。リモートの比重を高め、常にキャンパスにいることを前提としないのなら、地方の大学にとって打撃である。東京や海外の名門大学に籍をおき学ぶことがやり易くなるからだ。大学院レベルではそうしたことが顕著となるかもしれない。

家から通える地域の大学としては、やはり、地域と繋がりをもつことのアドバンテージをより強くすることになるのだろう。その点では武漢コロナウイルスの終息を待つより他ないといえる。逆にもっと広域で学生を呼び込むだけの魅力を打ち出すことが出来るかが問われるところでもある。ニッチなマーケットの掘り起こしである。

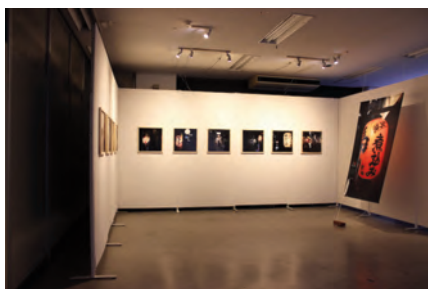
デザインによる地場産業の育成はなかなか思うようにいかない面がある。それと同じく、難しいものではあるが、デザインならではの思考で、新たな学び方のビジョンを提示実践したいものだ。

.....

コロナ禍における卒業制作展 ～その対策と展望について～ 田崎冬樹（横浜美術大学）

1都3県に緊急事態宣言が発令されている中、横浜美術大学は2021年2月4日（木）から7日（日）まで横浜美術大学構内において卒業制作展を開催した。1年前は日に日に新型コロナウイルスのニュースが増えていく中、2020年2月13日（木）から16日（日）まで大学構内で開催されたが、学外での選抜展（昨年度は横浜赤レンガ倉庫にて3月5日～10日を予定）は開催を見送ることとなった。

横浜美術大学では文部科学省発出『感染拡大の防止と研究活動の両立に向けたガイドライン（改訂）』および公益財団法人日本博物館協会発出『博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン』をもとに卒業制作展のガイドラインを作成した。



作品展示風景-1 (写真専攻) : 個室のようにすることで隣り合う作品との距離をとった



作品展示風景-3 (手前: クラフト専攻 奥: テキスタイルデザイン専攻) : 展示空間内での設置数を減らし作品同士の距離をとっている

展示に関しては作品と作品の間を十分にあけること (2m目安)、来場者による作品接触の禁止、展示室の換気などに十分留意の上設営作業を行った。来場者が訪れる際の受付場所を2箇所 (正門、北門) としマスク着用の確認、手指消毒、検温、健康状態の確認、さらにQRコードによる氏名、電話番号の登録をお願いして来場者や大学関係者に新型コロナウイルスの感染が発覚した場合に連絡する場合があることを伝えている。登録の完了後に紙製のリストバンドを装着してもらい、検温済みであることの証明とした。各棟の入り口受付でもリストバンドの有無を確認の上、漏れないよう徹底した。

他大学の事例を見てもオンラインによる事前予約制や学内関係者のみの入場制限、またはオンライン上での開催など様々であり、それぞれで出来る限りの感染対策に創意工夫をしていることがうかがえる。横浜美術大学でも事前予約制など一部入場の制限を設けることも検討されたが大学の立地的な観点から来場者が殺到することは考えにくく、入場制限はせず通常通りに開催することとなった。

これまでも作品によって来場者が触れて楽しむ (プロダクトデザインや絵本など) 展示形態があったが今回は全てにおいて作品への接触が禁止となっていた。



作品展示風景-2 (絵本専攻) : 絵本への接触回避のため原画をインスタレーションのように展示



作品展示風景-4 (アニメーション専攻) : 作品同士の視聴距離をとり、視聴人数に制限を設けた

しかし触れられない分、作品内容をどのようにプレゼンテーションするか学生が再考する好機と捉えることもできる。来場者と距離をとりながら身振り手振りで説明している学生もいつも以上に散見された。

今の時代、オンラインでの美術鑑賞も珍しくなくなってきている。しかし目の前で実物を鑑賞することでしか味わえない部分は多い。どんなにインターネットの技術革新が進んだとしてもデジタル信号に書き換えられた情報はバーチャルでしかない。今回来場者に一生懸命にプレゼンテーションしている学生を見て、人対人以上にインタラクティブなことはないのだと改めて思わされた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

コロナ禍中の日常

加藤三喜 (KATO Design)

都市・地区・施設、家庭、モノやコトを取り巻く環境において、情報を介したコミュニケーションはあらゆる場に存在します。私は日頃、こういったコミュニケーションデザインを軸として、施設環境内外を繋ぐサインやコーポレートからブランドまで設計計画、および関連グラフィックツール、商品パッケージ、本の

装丁などを手掛けている傍ら、専門学校で非常勤講師をしています。あ、子育ても。

昨年明けから怪しさを漂わせていたCOVID-19は、あっという間に世界を巻き込み、日常を変えていきましたね。自宅前の街灯にはためく五輪バナーを眺めながら自分の暮らしや仕事と、このパンデミックについて振り返ってみようと思います。

2020年春に開催予定であった「さいたま国際芸術祭」、旧庁舎 (メイン会場) を中心にスムーズな回遊を促すため最低限の誘導サイン計画に後輩と参加しましたが直球を受けて延期確定。運営側の尽力で半年以上経過した11月に開催、ネット予約制を導入し短縮された開催期間にもかかわらず多くの反応を得られたとことで少し安堵しました。予定されていた海外作家やワークショップ等変更も多々生まれましたが、この企画に従事されていた担当者は、若い方が本当に多かったのが印象に残っています。この困難を体感した経験値は貴重なものであったはず、タブレットを活用しその場で業務をこなしていく彼らの進化に明るい行政の未来を感じた現場でした。

そのほか、開発時点からご縁をいただいている寝台列車の関連業務でもいろいろありました。2019年末にはインバウンドを睨む強化を終え、多言語化への対応・専門スタッフの追加などを経て、実証を積みながら新体制を運用していこうとしていた矢先にパンデミックが発生。春の緊急事態宣言時期は、当初よりメンテナンス予定が組まれていたため、その時間をコロナ禍対策運行に矛先を変え素早い対応が開始、少人数、個室体制、クルーサポートという他にない利点を生かした環境見直しと旅の行程改定に始まり、接触を最小限にするためインフォメーション機器の情報強化や密を避けるイベントスケジュールなどを再検討されて、春からの再運行に向けて着実に具体化が進んでいます。(ふっ、息継ぎ)

「旅・移動」は多大な影響を受けています、ただ、ひとえに乗車を楽しみにされている方々への想いが業務を後押ししているように感じました。これは業務だけに関

ならず、パンデミック対策への数値化が正しく明確になればなるほど、後押しする情的なものも効力が増すように感じます。あの悲惨だったN.Y州におけるクオモ州知事の対応と近いものかもしれません。

そして教育の現場には、今しかない得られない時間を過ごしている学生たちがいます。たまたま講師仲間のITリテラシーが高かったおかげで、春先早々に仲間内でリモートシステムの運用テストなど、いくつかの実証実験を行いながら通信環境の確認等々、正直新しい環境に触れられるのを呑気に楽しみながら、学校側に提案していくスタイルで始められた事は幸いでした。リモートに即した授業方法の模索や新しいアプリの導入など、急に登校が規制された学生たちが不安に感じないような対策が練れたことは良かったし、学生によっては通常より濃厚なコミュニケーションが図れることがわかったり、得られることが多かった気がしています。(正直、辛いこともたくさんでしたけど)

どうしても現物確認による制作や時短・行動制限による体感型のリサーチなどは難しく、今後の課題も残りましたが、新たな春を迎えるにあたりこの経験値は世界的に学習システムを変えていきそうですね。

行政や大手企業は、一定の基礎体力により変化を受けつつもまだ多面的に立ち向かえる手法があるでしょう、「移動」や「会う」という行為行動が制限されている今、ある種のストレスは生まれますし、医療の現場を忘れるわけにはいきません。でも、同時にじっとしていない人々が沢山いることも感じます。(もちろんGAFAなど、これまで以上にバリバリ攻めており、巨大な資本が動いていますね。)少し前の大きな動脈から支流までに表されるような単調な方向性だけでなく、SNSによって世界の情報がリアルタイムで得られ、個々の表現も以前よりずっと軽やかに発信できることから感じ取れる世界では、コミュニケーションの観点においても一層パーソナルな情報発信がマクロなうねりを作っていくように思われます。ガンガン(擬音多くてすみません)進化

してくれているIT環境の恩恵を受けながら、新しい価値と向き合っていく私たちには、「環境デザイン」という言葉の意味が新たな範囲を抱えてきている事を感じさせ、日常の暮らしの中においても気候変動が続く地球に住う住人としても、変革と選択すべき課題を与えられているのでしょう。(NHK的に終わります)

・・・・・・・・・・・・・・・・

ほら、敢えて街に出ていく、のはどうだろう？
—やってみた、「未来職能に向けて『デザインの核を知る』」—

大倉富美雄 (NPO日本デザイン協会理事長)

今が、時代の大きな変換点にあるという感じ方は、ますます深まってきた。何か、じっとしてはいられない。じっとしていても何も変わらない。でも「デザイン」に何が出来る？

そこで思った事は、環境デザインへの実務的行動ではなく、環境を含めた「デザイン」への理解を、同業者間でなく、もっと一般市民に広げたいということだった、しかも会うことで。

都内に住んでいれば会うならこの時期、近辺からしか始められないので、地下鉄日比谷線広尾駅4番出口にあるビルの上階を借りている港区シルバー人材センターの協力を得て、思い付きで「デザインの核を知る」という講座を始めてみることにした。

話すなら、出来るだけ若い方がいい。その代わり、方針の見える大学で教えるのでもないから雲をつかむような話で、応募者が居るのかどうかも分からない。ともかくも2つの事、まず行動、次に気持ちの通ずる人たちとの出会いを大切に、を実行してみることにした。隔週土曜日の午後で続けるつもり。この投稿が出た後でも、紹介などで関心のある人は事務局(「みなとふれあい館」tel. 03-5475-1305)に連絡を。話したかったのは以下のような事。残念だが場所代もあり無償ではない。以下に論旨を紹介。

最近の日経新聞で、この時期に「米国民泊大手のエアビーアンドビーがナスダック市場に株式を上場しようとしている」、

そのCEOのB. チェスキー氏が、「大学でデザインを専攻し『起業に必要なことすべてを学んだ』と明かしている」と紹介しています。(20201201 Deep Insight「エアビーは三方よし」梶山誠記者)。その後、実際上場し、高値の評価を受けたことも報道されています。

今後、進む企業や社会の方向はAIやデジタル化です。しかしデジタル時代が到来するほど、逆に必要度が求められる職能は何でしょう。それは、人間が「感覚を持ち動く動物」である以上、食や性以外、体と身の周りへの感覚的満足と対応の仕方でしょう(もちろん、安全や安心を含めて)。ここでは、それに関わり、それを経済社会の中で生み出す職能が「デザイン」であると考えています。そこで接触の意味も考えます。「デザイン」はアートと科学の間に在り、人間を繋げます。

何でも気軽に「デザイン」と言われる今日この頃、改めて「デザイン」の本質を見極めましょう。コロナ禍の中、少しでも問題意識を共有している人たちとの出会いの場も求められています。

この番組は既に「デザイン」を知っていると思っている人や、もっと知りたいと思っている人が主な対象で、講義ではなく対話の中から自分の考えと行動力を引き出す(オープンイノベーション)企画です。もちろん全くの初心の関心でも、話しているうちに深い理解に至る可能性もあります。

「主に、若い人向けの前衛的専門サロン/トーク&ワーク」で、メイン・テーマは「未来職能に向けて—『デザインの核を知る』—人と感性/アートから商品、住居から都市までの現在と未来—」です。
・・・・・・・・・・・・・・・・

EDplace

「新しい生活様式」と環境デザインについてのアンケート集計

山田弘和（デザイナー／横浜美術大学名誉教授）

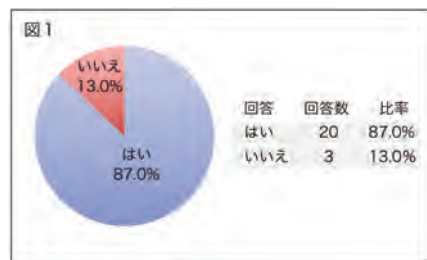
アンケートの集計について

前のEDplace89号にてご協力をお願いしたアンケートは、コロナ禍にも関わらず合計23の回答を得ることができました。

さて、集計を行なった2020年12月末時点では、世界的な感染は一層の拡大傾向でしたが、2021年2月10日の本項締め切り時点で、ようやく日本政府も医療従事者から順次ワクチン摂取が決定されたものの、暫くはウイルスとの共生が続く状況にあり、未だ出口は見えないままです。

本稿では、とり急ぎ集計結果を報告させていただきます。

Q1：政府が提唱する「新しい生活様式」という文言は理解できましたか。

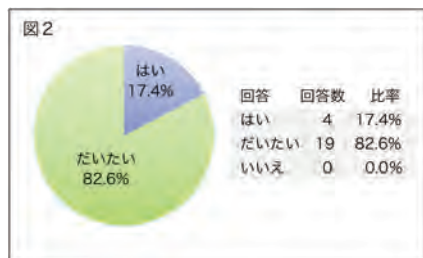


結果は、9割弱の人が理解されましたが、1割強の方は異議を唱えています。「Go To」のように命令形ではなく、具体的に行動を示す言葉はないまま、「新しい」という文言に全てを託した印象ですが、政府広報に掲載された「マスク着用」、「三密回避」、「ソーシャルディスタンス」、「手洗いうがい」などのキャッチコピーに補足され、ようやく理解されたものと感じます。

ちなみに、「新しい生活様式」をネットから検索してみると、*new lifestyle* や *new commons* という表現が海外メディア、新聞記事に登場した時期が2020年の初頭で、それを直訳したのが、政府と専門家委員会による考案かと推測されます。

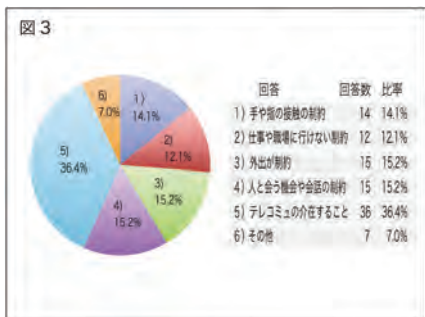
Q2：それをあなたは実行していますか。

その行動変容は実行されたのかについて、「はい」と回答された方が2割弱、「だいたい」実行したという方が8割強で、合わせて100%になります。流石に、「いい



え」は0%という結果から、事態の緊急性と危機意識は高かったことが感じられます。

Q3：感染拡大後、今までの生活が一変したことは何ですか。（複数回答）



結果は、5) の「テレコミュニケーション手段が介在する制約」が1位で、36.4%になったことは興味深い回答です。大学などの講義形式は従来から対面式が主流でしたが、昨年の春は卒業式の中止決定から大型連休までの短期間に急な準備を強いられたにもかかわらず、デザイン・工学系大学でも試行錯誤しながら、リモート講義から実技までが実践されたことは、予想を遥かに超える対応力だったと感じていますが、初めて授業に導入された教職員は多数であったことが推測されます。

2位は、3) の「外出が制約されたこと」と4) 「人会う機会や会話が減ったこと」の制約が各々15.2%と同数で並び、3位は1) の「手や指の接触が制約されたこと」が14%でした。4位は2) の「仕事や職場に行けないこと」で12%でしたが、2)～5) を合わせると、約8割の方が、何らかの「行動の制約」を強いられていたことがわかります。6) の「その他」は7%でしたが、自由記述に寄せられた指摘

は9件ありましたので、下記します。

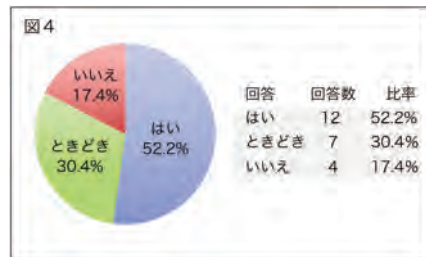
a. 主に「行動・活動の制約」では

- ・「出張の制限」
- ・「運動不足」
- ・「食事準備片付けなど家事の増加」
- ・「日常の買い物の増加」
- ・「自家用車による移動の増加」
- ・「家時間の増加による運動不足」
- ・「図書館利用の増加」
- ・「調査の制約」
- ・「病人の介護」

b. 一方、下記の2件は、制約を肯定的に捉えた回答でした。

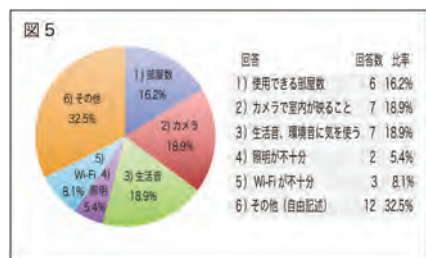
- ・「気分転換と太陽を浴びて長く歩くことの楽しみ」
- ・「家時間の有効利用による楽しみの増加」

Q4：あなたは感染拡大以後、リモートワークをされましたか。



集計から、「はい」が過半数を超える52.2%で、「ときどき」の30.4%を合わせると8割以上の方がリモートワークを実行されている結果でした。これは、コロナ時代には正に *new commons* と云える行動変容でしょう。「いいえ」は17.4%でした。

Q5：リモートワーク中、住宅について困ったことは何ですか。在宅リモート等をされなかった方もお答えください。（複数回答）



トップは、6)の「その他」が32.4%になり、12件のコメントが寄せられていますので、後述します。

2位は、2)の「カメラで室内や家族、生活風景が映ることへの対策」と、3)の「生活音や室外の環境音に気をを使う」が同数回答の18.9%で同順位でした。3)は家人の話し声や、ドアの開閉音、来客チャイム、キッチンの蛇口やトイレの流水音、外部からは車の警笛など、遮音されたオフィスとは異なる生活環境音が在宅により歴然となったものと伺えます。おまけに換気のために、窓は出来るだけ開放が推奨されていました。3位は1)の「使用出来る部屋数が限られている」の16.2%でした。家族と一緒になら夫婦それぞれの仕事と、子供がいれば授業中は机とPCが必要になるため、物理的に足りなくなることは想像出来ます。

4位は5)の「Wi-Fiが不十分」の8.1%でした。その例として自由記述からの転記です。

・「家族全員がリモートワークするためWi-Fiが不安定でした。」

また1)の「部屋数の不足」と2)の「カメラで映る…」に関連する自由記述には、
・「リモート時に背景になる壁面に苦労した。」という意見があり、私も同様な経験をしています。

続けて6)の「その他」に記述された意見を記します。

・「デザイン学会の大会では長時間に及ぶ中で打ち合わせや退出で苦労した。」という指摘は、開催時間が重複するなどによる制約を記されています。

また、在宅を肯定的に受け入れた記述は
・「工夫して楽しむこと」

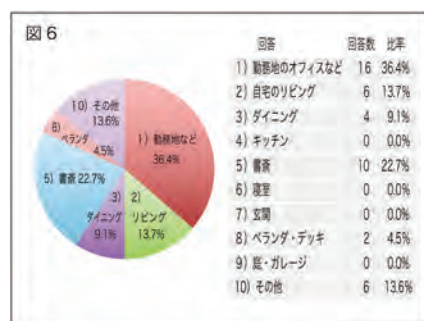
また、次の2つの記述は、仕事場は従来通りで困らなかった様子で、コロナ前と同様に使える環境にあることを感じます。

- ・「オフィスが近隣のため」
- ・「必ず職場に来てリモートに参加した。」
- さらに、次の2件は、
- ・「仕事モードにスイッチが入らない。」
- ・「手間を増やしたくない。」

共に、在宅を時々行なった方の印象とされますが、あまり在宅が良いとは思われなかったのか、やはり仕事は職場、研究室が使いやすいという意識が伺えます。

その他、「特になし」とされた3件は、従来と変わらずに仕事をされた方と、在宅を十分こなされた方が混在するように推測されました。

Q6：感染拡大後、あなたは勤務先、または自宅のどの場所で収入につながる仕事をされましたか。(複数回答)



順位は1位が「勤務地などのオフィス…」で36.4%でした。2位は「書斎」が22.7%、3位が「リビング」の13.7%、4位が「ダイニング」9.1%の順に並びました。

この「書斎」は特徴的であり、在宅ワークの場をコロナ禍前から確保されている方が多い傾向が読み取れます。デザイン業を行いながら自宅兼オフィスという方が、多数自由意見に寄せられています。

「リビング・ダイニング」は空き時間帯のシェアを前提にすれば、簡単な家具やITツールの配置などの工夫で、十分活用可能な仕事環境になると思われます。「ベランダやデッキ」の回答も2件で4.5%ですが、音声漏れなどに苦労されたことは想像されます。玄関、庭、ガレージはゼロでした。

その他、自由記述は6件でした。

a. 職場で仕事をされた記述

・「オフィスが住まいに隣接しているため問題なく仕事ができている。」

b. 自宅兼オフィスで仕事をされた記述

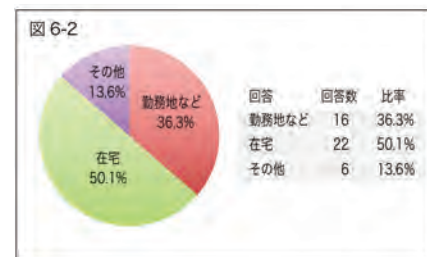
- ・「自分の仕事部屋（小さいんですが）」
- ・「自宅兼事務所なので」

c. 自宅内で場所を工夫された記述

・「Zoomなどの際はその都度気分家で家で場所を変えて楽しむようにしている。」

・「使えるところはどこでも」

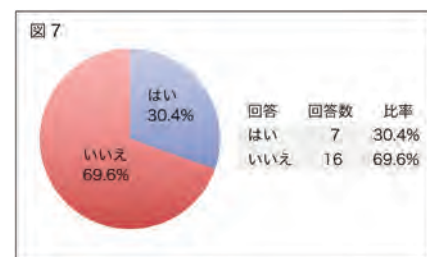
・「息子（大学生）もリモート授業のため、デスクトップPCを共有した。予め、使用の時は早めに時間を知らせた。被る時は、息子がノートPCで別室で使用していた。主人は日中使わない部屋にアウトドア机を購入して、籠もって仕事をしていた。自前ノートPCの他に会社からの支給PCを使用していた。」



以上の集計から、「職場派」対「在宅派」は、1)「勤務地のオフィス…」の36.3%が「職場派」として、2)～8)までの「在宅派」は合計すれば50%となり、在宅派が半数であることがわかります。「その他」は13.6%でしたが、自由記述の通り混在しています。(図6-2)

また質問文に、「収入につながる」という記載について、自由記述に「収入につながる仕事はしていません。」とのご指摘がありました。これは昨年実施された国勢調査の質問に準じたもので、経済活動上の仕事をどこで行なったかをお聞きしたいためですので、ご了承いただければ幸いです。

Q7：「新しい生活様式」に対応し、住環境は変える必要がありますか。

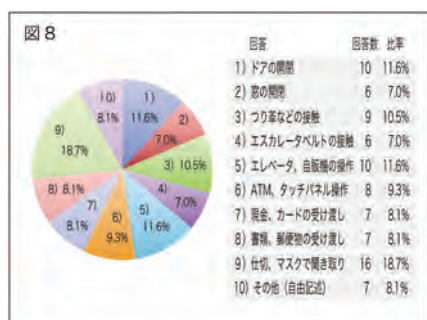


意外にも「はい」と回答された方は30.4%で、「いいえ」と答えられた方が69.6%と多数派でした。住環境の更新は必要ないと感じている方が約7割で、必要と感じる方が3割です。

その理由についての質問で、「はい」のとき、変えることは何ですか。」の問いには、2件と少ないものの、記述自体は広がり示す9つの指摘がありましたので下記します。

- ・「職場で陽性者が出たことによる課題は山積する」
 - ・「変える必要を感じていても具体的に浮かばない。」
 - ・「余裕（余地・予備）」
 - ・「物を減らす（断捨離）」
 - ・「特に空気清浄の環境」
 - ・「音への対処法」
 - ・「ドア付近と仕事場に除菌、マスク、コート掛けエリアの追加」
 - ・「高齢者と同居のため部屋・PC環境を整えること」
 - ・「戦後から続くnDK方式から離脱し、社会とつながる機能を備えた住居環境に」
- 変えるにしても、やはり工夫と労力が必要で、難易度は混在していると感じます。

Q8：公共環境で困ったことは何ですか。（複数回答）



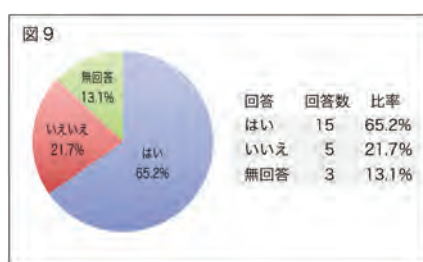
1位は9)の「仕切りやマスク越し音声の聞き取り」です。以下はあまり比率が変わらないものの、2位には1)「入り口やトイレドアの開閉」と、5)「エレベータ、自販機、券売機などのスイッチ操作」が同数の11.6%でした。3位は3)の「つり

革などへの接触」の10.5%になり、4位は、6)「ATMなどのタッチパネルの操作」、5位が7)「現金、カードの受け渡し」、8)「書類、郵便物、宅急便の受け渡し」に加え、10)「その他」が各々同数の8.1%でした。

1)～8)までは、接触感染の不安が大きく、個々の比率は少ないものの、合わせると7割以上になります。特に昨今はスマホに代表される表示デバイスをタッチ操作する方式が公共の場にも多く、コロナ禍以降非接触式に移行させる必要が浮上していることから、様々な製品インターフェイスデザインの大きな課題として指摘できるでしょう。

- 以下に10件の自由記述を記します。
- ・「マスクをつける場面とつけない場合の判断基準」
 - ・「スクリーン等対策の取られていない飲食店」
 - ・「スーパーなどのレジ待ちで間隔を開けない人に注意しにくい」
 - ・「スマホに代表されるタッチ操作の見直し」
 - ・「公共トイレの不安」
 - ・「仕事場が公共施設のため換気や消毒が必要になったこと」
 - ・「郵便等はドア越しの置き配をお願いしている」
 - ・「外出は極力避けて帰宅後は手洗いすること」
 - ・「自転車と歩行者の共用する道路デザイン」
 - ・「過剰なまでの入場制限と防疫対策」

Q9：「新しい生活様式」に対応し、公共環境は変える必要がありますか。



「はい」が65.2%、「いいえ」が21.7%、

回答率は約87%でした。結果は、Q7の「住環境は変える必要がありますか」とは逆に、変えた方がよいとする回答が6割強になりました。

自由記述は15件で計26の記述がありました。

- a. 「接触の回避」について（7つの記述）
- ・「一般的な感染予防策」
 - ・「直接の接触を減らす工夫」
 - ・「飛沫防止スクリーンの設置ルール」
 - ・「距離を保つ工夫など」
 - ・「公共の場になる自販機、券売機などのインターフェイスを非接触式にすること」
 - ・「自動ドアの普及」
 - ・「接触操作する箇所の対応（非接触対応）へ」
- b. 「密の回避」について（2つの記述）
- ・「電車の定員」
 - ・「多人数詰め込み式から身体的距離を配慮した鉄道車両」
- c. 「換気の改善」について（6つ）
- ・「換気能力の向上」
 - ・「特に空気清浄の環境」
 - ・「定期的な空調で換気をする」
 - ・「殺菌効果のあるプラズマクラスターなどを出入り口に設置する」
 - ・「発生に伴う空気接触感染軽減の工夫」
 - ・「公共交通車両の換気システムの可視化と見直し」
- d. 「場」について（5つ）
- ・「屋外空間を豊かにする」
 - ・「駅等の待合の環境」
 - ・「駅などの交通環境」
 - ・「公園等の管理体制など」
 - ・「大規模事業所、学校施設のサテライト化」
- e. 事業形態や運営意識の変換を示唆する意見（3つ）
- ・「公共的立場の職業にある事業者側のモラルや事業・サービス様式を一定の様式以上に変える必要がある」
 - ・「公共トイレも含めて使用頻度の高い部分への工夫や清掃は必要か」
 - ・「公共環境としてのカタチや実際の動

作・所作（コト）に置き換えた時に具体的にどのような空間やものやルールが必要になるのかを示す必要がある」

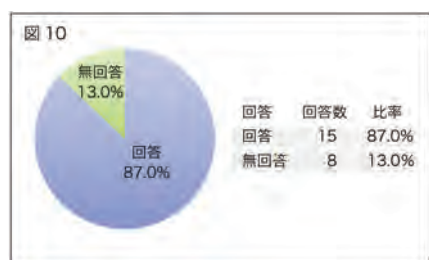
f. 政府方針の長期的ビジョンの再定義を指摘する意見（1つ）

・「厚生労働省の提唱する『新しい生活様式』ではなくSDGsに則った公共環境の整備こそ必要」

g. その他（2つ）

- ・「未だ具体的にはわからない」
- ・「特に思い当たりません」

Q10：コロナ禍以降、それまでの生活と比べて良いと感じたことは何ですか。



自由記述は20件で回答率87.0%になり、さらに複数回答は27と、非常に多くの記述数になりました。

a. 通勤や移動時間の省略によるメリットについて（9つの記述）

- ・「不要な会議（時間）が減った」
- ・「散歩が習慣になった」
- ・「テレワークが中心となり移動にかかる時間がなく効率的に仕事ができる」
- ・「生活や社会などに置ける考え方や行い方の選択肢が増えたこと」
- ・「自分時間がより多くなった」
- ・「通勤や移動時間を使わずに済むこと」
- ・「通勤時間を縮小出来たこと」
- ・「オンラインのおかげで距離感がなくなったこと」
- ・「あちこちに行かなくても打ち合わせができるので楽ちん」

b. 物理的な制約のない自由さについては（3つの記述）

- ・「インターネットを通じた会合など別の世界が広がった」
- ・「リモートなら自宅で会議ができること」

・「自由気儘な時間」

c. 公共の場で感染回避行動が効果を上げているという指摘（2つの記述）

- ・「密を回避する方向に向かっていること」
- ・「すれ違いざま大声で喋ったり咳をしたり、大きくしゃみをしたりされなくて済むこと（相手がマスクをしているのがほとんどなので）」

d. 大学授業に関する利点として（4つ）

- ・「大学での会議や講義で画面共有により資料の扱いがペーパーレス化した」
- ・「オンラインの活用が進んだこと（会議や授業）」
- ・「教育の現場ではリモート環境を有効に活用できれば新たな取り組みは得られると感じた」
- ・「大学の授業については実技指導に不安があったがリモートにより個々の学生に対応する適切な指導ができた印象がある」

e. 従来の生活習慣などの見直しにつながったこととして（6つの記述）

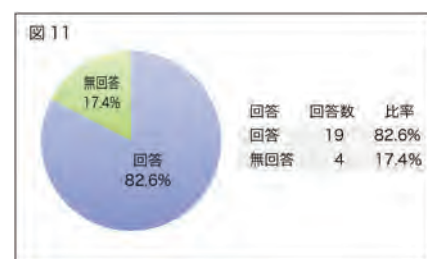
- ・「外食のお持ち帰りや宅配が豊かになった」
- ・「自身の消費生活行動の見直し」
- ・「身近なコト」への気づき
- ・「空間や人について考える機会になったこと」
- ・「手続きが簡略化されたこと」
- ・「それまでの日本は恵まれすぎているが例えばスペインアンダルシア地方などの質素な人間本来ならのあるべき生活スタイルの反省になったと思います」

f. その他の意見として（3つ）

- ・「元々自営のため仕事の仕方で大きく変化を強いられていないため良さは感じていない」
- ・「思い浮かばない」
- ・「特に無い」

Q11：新しい生活環境が登場しても、従来の生活環境で変えてはならないことは何ですか。（自由記述）

回答率は82.6%でした。自由記述は19



件で、複数回答を加えて、21の記述を下記します。

a. 人に会うことの習慣について（12の記述）

- ・「ヒューマンコンタクト（飲み会を含む）」
- ・「友人や知人との連絡」
- ・「人とのコミュニケーション（対面の重要性）」
- ・「人と人の直接的で生な場の交流などは変えてはならない」
- ・「家族やその他の人（学生等）との交流やそのための空間（リモートで映像や音声を積極的活用している。外食する際は、対策を講じたお店などに行き、やめたり減らしたりしていない。）」
- ・「人とのコミュニケーション」
- ・「（生活環境、とは少し異なるかもしれませんが）リアルな対人対物のコミュニケーション」
- ・「実際に会って会話の方が、良いアイデアも出やすく、話が早い」
- ・「リモート飲み会など親睦を深めるのは重要なのかと思う」
- ・「対面での人とのコミュニケーション」
- ・「人と共有する時間、場所、コトなど」
- ・「ならない？のかはわかりませんが、日常の暮らしの営みはかわらないかなと。」

b. 相手を思いやる気持ちやマナーについて（5つ）

- ・「愛情」
- ・「敬意」
- ・「相手を思いやる気持ち」
- ・「自分の行動が相手にどのような影響を与えるかを考える想像力」
- ・「エチケットやマナー」

c. 直接的な接触が少なくなることへの危

惧について（2件）

・「体験価値は、大切だと思います」

また、人が寄り添って行う地域行事などが危機にさらされる可能性」

・「神事や芸能など、地域固有の伝統的文化の伝承と自然環境の保全」

d. その他（2件）

・「多分あるとは思っているが現状は思ひ浮かばない」

・「特に無い」

というご意見もありました。

人は人に会うことで喜びを得ていることや、人と人が直接会って話をするなど、これまで連綿と続いてきた人間的習慣を中心に、変えてはならないこととする圧倒的多数のご指摘にはつくづく共感します。

以上がアンケートの各質問についての集計と分析結果でした。

COVID-19と人間環境の相克

本稿が発行される2021年の春までに、感染拡大が下火になれば幸いでしたが、未だウイルスは衰えるどころか、短期間に何度も変化する変異株による感染拡大が不安な状況です。

ウイルスの定義は、「生物か無生物か」と問われているように、体内に入る前は全く代謝の振る舞いが無いものの、一度生物の体内に入ると、感染を受けた宿主の代謝により複製機能が働き、自身のリボ核酸と見なして複製を続けるという事実です。さらに鶏や蚊からではなく、人から人に感染するCOVID-19は、私たち人類が暮らす高密度な都市型の生活環境が悉く有利な環境となり、感染によって増殖しやすく、大変厄介な物質であることがわかってきました。従来のインフルエンザウイルス以上にCOVID-19は、接触やマイクロ飛沫でも感染しやすいため、とても怖いことです。

従って、大量の人が通勤時間に混雑した電車で移動することや、同じ空調のオフィスで、一日中仲間と仕事や授業を行

う従来型の慣習的な行動の他、仕事が終わって、みんなで憩う飲み会などは、ウイルスには絶好の宿主と出会う感染と増殖機会になる訳です。日本で最初に起きたパンデミックが大型クルーズ船内であったことも、人が快適で便利に感じる高密度な都市環境をシミュレートしたような人工環境内でのことから、今となっては大いなる警鐘だったことに思い至ります。

感染連鎖を停止させるには

そこで唯一の対策は、ウイルス感染とその増殖の連鎖を休止させるために、やはり一定期間は直接複数の人と同一空間や近い距離で会うことを休止する「非接触」を徹底する行動でしょう。体内にウイルスを取り込まないようにマスク着用、石鹸による手洗いを続けて、それぞれの地域ごとに、陽性者でも人に感染させなくなる10日から2週間を目安に一定期間、一斉休止を実施することが必要に思えますがいかがでしょうか。体内に一定期間入れなければ、ウイルスは物理的に減少するものと考えられています。Q11で「変えてはならない」代表意見であった「人と人の直接的接触」は、暫くは折角習得されたりリモート会議や授業などの代替手段を講じた上で、コロナが衰退期に入るまでは、意識的に回避されることが必要に思えます。

デザインの役割について

一方、現実には、経済至上主義の慣例から、ともすればコロナ禍による経済の停滞を次の経済再生策に捉えて、「新しい生活様式」を促進させる先に、次の市場に発展させるという考え方が見え隠れしていることも事実です。人命や健康的な社会づくりより、経済優先の考えが多数派であることは、大いに危機を感じます。

デザインは、近代以降、経済活動の役割を担いながら発生した歴史があり、多様な商品市場を形成し消費経済を回すために活用されてきましたが、今回は目先のコロナ禍特需をめざすのではなく、別

のウイルスと並存するかもしれない今後の社会づくりに向けて、地球環境に負荷を掛けず、超長期的に人間活動と自然調和を整合させていく方策を見つける必要があります。デザインはその役割変化が求められています。

みなさんからお寄せ頂いたアンケートは、感染拡大後の体験的な印象を伺うことが出来ましたが、長期化するウイルスとの共生状況を前提にした次の環境デザインと、社会に必要なデザインが向かうべき視点となるご指摘が多数寄せられました。本稿を通じて、皆さまと共有出来れば幸いです。

感染の蔓延する状況にあっては、皆さま、引き続き十分接触機会等を回避され、くれぐれも感染されないよう、お気を付けてお元気にお過ごしください。

ご協力有難うございました。

2021年2月10日

参考文献

- 1)『生物と無生物の間』川喜田愛郎著、岩波新書245、1956
- 2)『生物と無生物のあいだ』福岡伸一著、講談社現代新書、2007
- 3)『ウイルスは生きている』中屋敷均著、講談社現代新書、2016

研究ノート

京都美術工芸大学大学院

研究ノート——1

祇園祭山鉾町の会所建築をめぐる現代的課題のリサーチと再生計画提案

共存しつつ主張する会所

新開章敬（京都美術工芸大学大学院 工芸学研究科建築学専攻1年）

京都美術工芸大学では、今年度から大学院がスタートした。本ノートは、大学院1年生が取り組んだ前期演習の報告である。

2020年度 建築デザイン特別演習Ⅰ

課題：祇園祭山鉾町の会所建築をめぐる現代的課題のリサーチと再生計画提案

担当：森重、山内、他全教員

近世京都の町は、寄合などを行うための「町会所」（町家、町席）を持ち、共同利用空間として維持してきた。現代では会所を持つ町内は少ないが、祇園祭の山鉾を擁する町では、御神体や懸装品の収納、囃子の稽古場、祭り期間中の会所飾りの場の必要性から、会所建築が受け継がれている。明治期～昭和初期頃に建築された伝統構法の木造建築である会所建築は、建築そのものに関する問題や、祭の継続に関わる多様な問題を背景に、非木造への建て替えや他用途との複合建築化などが進んでいる。本演習は、四条新町西入南側に位置する、郭巨山（かっきょやま）の町会所をケーススタディとし、山鉾を持つ町の会所建築をめぐる現代的課題のリサーチを行うとともに、維持保全、活用に関する実践的な提案を行う内容である。

山内貴博（京都美術工芸大学）

.....

34箇所の会所建築の分類

会所建築は全部で34箇所ある。34箇所を便宜上、「建物形式」「機能」「期間外利用」に分けて分析した。建物形式は会所の有無で2つに分けられ、会所ありでは戦前木造で建て替えないものと構造形式は問わない建て替えられたものと2つに分けることができる。

会所あり（戦前木造）は34箇所中14箇所。会所あり（建て替え等）は34箇所中8箇所、会所を持たないものは34箇所中12箇所であった。これは便宜上分けたものであり、分け方で多少の違いは出るものの大まかな分布は信用できるはずである。

ここから推測できることは、会所あり（戦前木造）と会所なしが同じくらいの総数で、2極化していることである。もともと34箇所に会所があったと仮定すると、会所を手放すほうが多いことが考えられる。



町会所の3つの形式

町会所には3つの会所形式がある。

表棟型町会所（〇〇山）と表棟型町会所（〇〇鉾）そして、奥棟型町会所（〇〇山）の3つである。郭巨山町会所は 最初に挙げた表棟型町会所（〇〇山）に該当する。

会所形式を大きく変更するとこのルールに逸脱してしまうため、慎重に検討する必要がある。

必要がある。

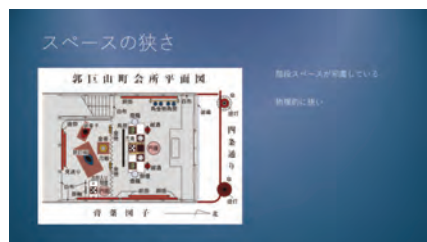
郭巨山町会所が抱える3つの問題

郭巨山会所建築の問題点は大きく3つある。会所の老朽化とスペースの狭さ（お飾り場が足りない）そして、会所の維持管理である。

会所の老朽化の問題点としては表棟会所は明治44年（1911）頃、土蔵は昭和5年（1930）頃に建てられたと言われている。100年弱前に建っているため、表層部分に劣化がある。



スペースの狭さの問題点としては、お飾り場をするためのスペースは表棟1階部分に当たるが、階段の位置の問題やそもそも物理的スペースが足りていないという点である。



会所の維持管理の問題としては、祇園祭は年に一度のイベントのみで会所としての利用期間がごくわずかなことである。会所を保存をしたいというニーズと物理的狭さから拡大しにくいという2つの課題がある。



会所の維持管理として鯉山を例に挙げ
る。鯉山はお祭り期間外の収益源として、
こいやまサロン、こいやまCafé貸切プラ
ンを行っている。



リサーチからわかる道筋

郭巨山がたどる道筋は3つあると考えた。会所をなくしてしまうか、それとも
ほぼそのまま改修して使用するか、建て
替えるか。リサーチの段階ではこの3つに
なると考えを収束させた。

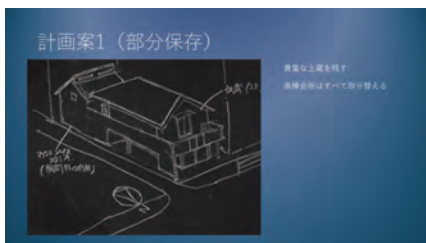
郭巨山会所現地調査から考察

実際に現地を調査して確実に変更して
も問題ない点があった。それは表棟会所
と土蔵の間の空間である。ここには奥の
間（物置）と使用できないトイレ（水漏
れ）がある。そして写真でも分かる通り、
波板がある。これは雨が降ったときに床
が土なのでドロドロにならないようにし
てしていると推測した。ただせっかくの会所
を波板で処置しても安っぽく見えてしま
う。以上のことから、このスペースを利用
してスペースの拡大を考えて見ることに
した。



計画案1（部分保存）

図は土蔵を一部変更し、表棟会所をす
べて壊す案である。デメリットは既存会
所の保存になっていないこと。もともと
の会所の面影がほぼ無くなること。メリ
ットはスペースを拡大しやすく、土蔵と
表棟会所がスムーズに繋がることである。

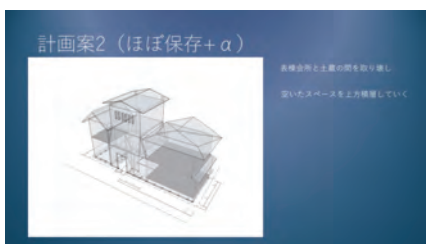


計画案2（ほぼ保存+α）

今度は表棟会所と土蔵をほぼそのまま
残し、残った間のスペースだけを使って
上方に拡大する計画である。

一見良さそうに見えるが、上層に上がる
ための階段を設けると実質スペースはほ
ぼ増えないのが問題。

メリットは上方へ自由に拡大できること
が挙げられる。



計画案3（敷地上方積層）

計画案1の保存の問題と計画案2のスペ
ースのコストパフォーマンスが悪いという
欠点を補い、上方へ自由に計画できる利
点を継承したのが計画案3である。ストラ
クチャーを下層で固めて上層で既存会所
の上まで計画できる利点がある。



最終案への道筋

計画案3を採用することで、3つの問題
点が以下の通り解決することができると
考えている。

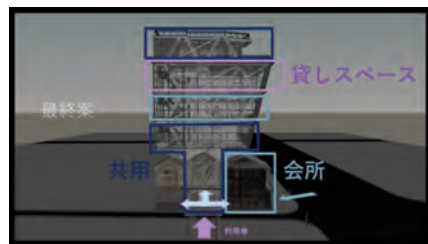
保存（老朽化）の問題は、既存会所の
屋根の出幅や一部外壁等を改造すること
で、ほぼ既存会所の姿となり解消される。
現在の会所をきれいに再編集できる。

スペースの狭さの問題は、上方拡大は
容積率700%まで高くすることで解消され
る。しかし、高くしすぎると既存会所と
のバランスが悪くなり、単純に会所建築
が下敷き状態になってしまう。無駄に大
きくして利用されない空間ができてしま
う恐れもある。

維持管理の問題は、表棟会所と土蔵の
間のスペースを利用した拡大計画により
お祭り期間、お飾り場スペースをほぼ全
層にわたって利用することで解消できる。
お祭り期間外は、瞑想スタジオ（貸しス
ペース）として利用されることを想定し
ている。

最終案へ（新会所上方拡大既存保護）

結論として、既存会所建築の屋根を覆
いかぶさるように新しい建築物を計画し
た。提案の結果、4つの利点が生まれた。
既存会所の低層部分のファサードを分断
させないようにできたこと。膏藥の辻子
に一般客用の出入り口を設け、開くこと
ができたこと。周辺高層ビル群に馴染む
ように適度な高さで力強さを醸し出した



こと。そして、最後にスペースの問題の解消として、階層を任意に増減することができる余地を残せたこと。他にも解決方法があるかもしれないが、ひとつの方法としてここに提案した。

建物の内部への工夫 (1F)

既存会所(表棟)を一部土間にし、階段を撤去した。そうすることで、階段による移動の煩わしさがなくなるのと同時に床面積を有効に活用できる。階段は中庭部分の構造体をコアとして、内部に通した。利用者は膏薬の辻子から入ることも可能で、コアは表棟の土間と土蔵を連絡している。



建物の内部 (2F)

表棟2階はもともと事務スペースであったが、お飾り場に変更した。暗くなりがちな表棟に吹抜けを設け、開放的で一体感のある空間にした。コアの階段から表棟2階にアクセスできる。



建物の内部 (3F)

3階は共用スペースとなっている。主に地域の利用者が自由に休憩できるように休憩スペースを2箇所設けている。

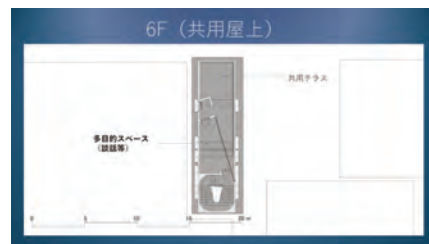
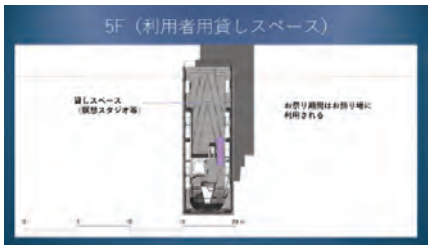
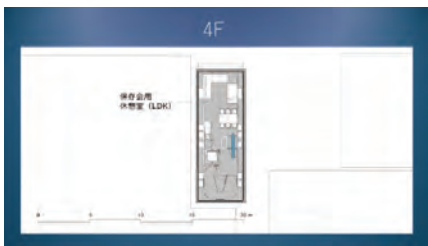
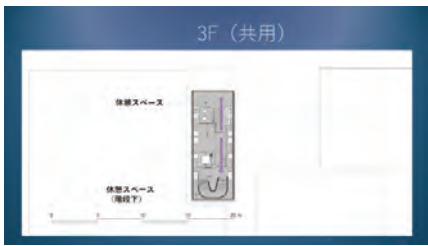
建物の内部 (4F)

4階は保存会が利用する休憩室(LDK)を計画した。もともとの表棟の2階(事務所)をこちらに移動した。

建物の内部 (5F・6F)

祇園祭期間外には、瞑想スタジオ(貸しスペース)といった物品が少ない用途に貸し出せるようにした。物品が少ないことは、お祭り期間中のお飾り場にもすぐに変容できる利点がある。

会所の中庭を構造体で埋め尽くされたことにより、外部空間がなくなった。これを解消するために、共用屋上を計画した。



最後に

今回の問題点の一つとして、スペースの狭さがあった。解決する方法として、ひとつは隣の駐車場を買取って隣にもう一つ建物をつくる計画案もあったが、初期投資のリスクがある。用意された敷地内で解決できたほうが、一元化できて、維持管理がしやすいと考えたので、この方法は除外した。

最終案によって、既存会所の表層デザインを分断させないようにできたこと。膏薬の辻子に開くことができたこと。周辺の高層ビルに負けない建築をつくれたこと。そして、容積率700%まで上層に積層することが可能であること。建物を一元化し、維持管理のしやすさ、初期投資のリスク回避、スペースの拡大の可能性を秘めた一つの案として有効ではないかと考えている。

2Balance

邊見桃子（京都美術工芸大学大学院 工芸学研究科建築学専攻1年）

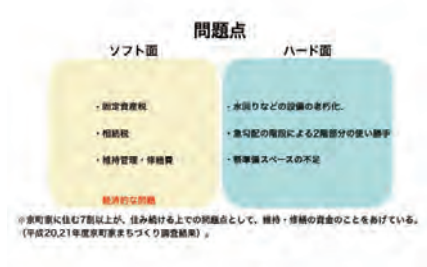
町会所とは

近世京都における「町会所」とは、寄合いなどを行うための事務所や集会所のことで、共同利用空間として維持されてきた。特に、祇園祭の山鉾を擁する町では、御神体や装飾品の収納、お囃子の稽古場、祭期間中の楷書飾りの場として重要な役割を持ち、祭の伝統と共に、会所建築も受け継がれてきた。しかし、明治から昭和初期ごろに建築された伝統工法の木造建築である会所建築は、建物の老朽化や利便性の追求、経済的な問題などにより、非木造への建て替えや他の用途との複合建築化などが進んでいる。



郭巨山町会所の抱えている問題

私はまず、郭巨山町会所の抱えている問題を、建物のハードとソフトの2つの側面から考察した。ハード面における問題点は、水回りなどの設備の老朽化、急勾配の階段による2階部分の使い勝手の悪さ、祭準備スペースの不足などが挙げられた。次にソフトにおける問題点は、固定資産税・相続税・維持管理・修繕費などの負担をどう賄っていくかという経済的な問題が考えられた。



文化と利便・経済のバランス

これらの問題を解決する一つの例として、今ある町会所を収益性とスペースの拡大が見込める現代的なビルに建て替えてしまうという方法も考えられるが、私個人としては、減少の一途を辿る京町家を受け継いでいくことは、京都の生活文化を守り、魅力あるまちづくりをする上での貴重な財産であると考えている。一方で、町会所をリフォームして、建物の使い勝手などのハード面を解決しただけでは、経済的な問題が残っている以上、将来にわたって現在の町会所の形式を残していけるとは言い切れないと感じている。そこで、私は文化を守ることと利便性・経済面などのバランスをとるような計画を提案する。



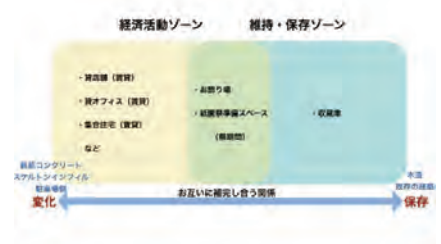
二つのゾーン

今回計画を提案する敷地は、町会所と、その道を挟んで東側にある、現在駐車場として利用されている2箇所を選択した。この提案のポイントは、「経済活動ゾーン」と「維持・保全ゾーン」という2つのゾーンを作り、お互いに補完し合う関係を作ること、町家の佇まいを残しつつ、経済的な面もカバーする点である。

「経済活動ゾーン」は、「維持保全ゾーン」も含めた固定資産税・相続税・維持管理・修繕費などの負担を賄い、「維持保全ゾーン」は、京都らしい街並みの保全のほかに、「経済活動ゾーン」の西側環境の改善や、高層ビルが立ち並ぶ地域にお

いて、町家と一体で計画することにより、「経済活動ゾーン」の魅力を高めることができると考える。

敷地とゾーンの関係性としては、現在駐車場として利用されている敷地を「経済活動ゾーン」、町会所側を「維持保全ゾーン」として計画する。「経済活動ゾーン」は将来的な需要に対応して変化していくことが前提となるので、鉄筋コンクリートラーメン構造、スケルトンインフィルを想定し、シンプルな間取りとした。

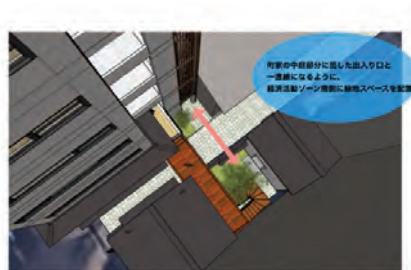




一体として計画する魅力

さらに、一体として計画することによる、魅力を生む工夫としては、町家の中庭部分に面した出入口と一直線になるように、「経済活動ゾーン」南側に緑地空間を配置した。現在道路部分が石畳となっているため、そのデザインを利用して、2つのゾーンの緑地空間の一部に石畳のデザインを取り入れている。それぞれのゾーンに路地を引き込むように緑地を設けることで、離れていてもなんとなく一体の空間と感ずるように工夫した。

次にもう一つの、一体として計画することによる、魅力を生む工夫としては、二つのゾーンの間に連絡通路を設置することを考えた。この通路は、二つのゾーンを行き来しやすくするだけでなく、膏葉の辻子の入り口を象徴するゲートのような役割を持たせることができると考えている。また、「経済活動ゾーン」側にエレベーターを設置しており、今まで階段でしか登ることのできなかった町会所2階へのアクセスをやすくしている。



建物の用途

それぞれの建物の用途としては、「維持保全ゾーン」の1階に町会所と稽古場。2階の意匠性が優れていることから、祭期間中のお飾りの場を2階に、蔵はそのまま収蔵庫として利用することを考えた。「経済活動ゾーン」については、1階に貸店舗、2階は連絡通路を通して町会所と繋がっていることから、一部会所機能を移し、トイレ、水回り、冷蔵庫などの設備的な部分を賄う。3階から上の階については、貸しオフィスや賃貸アパートを想定してい

る。

祇園祭の準備、後片付けのスペースに關しては、祭期間前後の利用しかしない、広い専用スペースを準備することは効率的ではないと判断し、1階貸店舗部分を祭期間前後のみ開放してもらうことを考えている。その際、作業しやすいように、1階貸店舗の西側は、大きく開放できるように工夫した。

祭期間前後の店舗部分の利用は、入居者の募集どきから提示する必要があるが、店側の負担が大きいため、代わりとして店側に提供できるメリットとしては、二つのゾーンを繋ぐ連絡通路を、お飾り場見学の動線の一部とすることで、店側も祇



園祭期間お客さん呼び込むことができる。

町会所変更点

町会所側の変更点としては、緑地空間をより有効なものにするため、町会所東側出入口を一部広げている。また、中庭への階段の設置、連絡通路からお飾り場を見やすくするために、2階南側外壁の除去、中庭を広げるため、増築・水まわり部分の除去をしている。中庭への階段、連絡通路の設置は、既存の建物を傷つけることなく行うことができ、利便性を向上することができる。

京都における都市政策制度

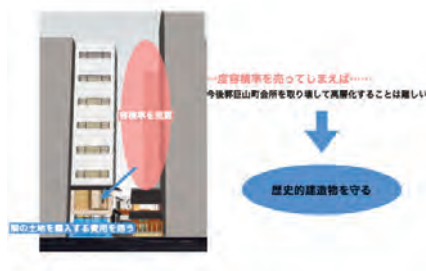
京都市は「50年後100年後の京都の将来を見据えた歴史都市京都の景観づくり」のために高度地区による高さ制限を行っている。しかし近年ホテルの建設ラッシュが進み、マンションやオフィス用地の確保が難しくなるなど、土地価格の高騰を招き、子育て世代の人口流出など、京都に住んで働く人が減っていくと言う問題が起きている。50年後100年後の京都を考えたはずの景観制作が都市存続の足かせになっている現状がある。つまり、京都の都市政策においては景観を守ることと経済面のバランスをとることが重要になってくる。



隣の土地を購入する経済的工夫（提案）

現在京都は、需要は他の地域よりかなり高いにも関わらず、高さ制限を行って

いるために容積率の移転をすることは難しい。しかし個人的には、容積率の移転は経済を活性化させる一方で、歴史的建築物の保存・復元をする今回の計画と相性が良いと考えている。例えば、今回の計画で隣の土地を購入するにあたり、郭巨山町会所上空の容積率を売買することにより、その費用を賄うことを考えている。一度容積率を売ってしまえば、今後、郭巨山町会所を取り壊して高層化するというようなことは実現しにくくなるため、結果的に歴史的建造物を守ることに繋がると考える。



容積率移転の条件

しかし無条件に容積率の移転を行っては、京都の景観を破壊する恐れがある。そのため容積率の移転（高さ制限の緩和）をする際に条件を設けることを提案する。京都における高さ制限は東山への眺めを妨げないことが前提になるため、容積率の移転（高さ制限の緩和）をする際の条件として、「東山の眺めを妨げないこと」「1つの建物が買うことができる容積率に上限を設けること」と言う2つの条件を考えた。これは、1つの建物だけ突出してしまうと、街並みのバランスが悪いが、分散してそれぞれの建物を少しずつ高くしても、それほど景観を壊さないと考えたためである。なお、この計画を最大限有効なものとするため、経済活動ゾーン側のビルは、高さ制限の上限である31mとして計画している。



最後に

町会所のある敷地の外に範囲を広げて計画することは、今回のように隣に偶然空いた敷地があった場合のレアケースである。たとえ敷地が空いていたとしても、現実にはそこを買い取れるかという問題があるが、今回計画してみて、町会所の敷地のみで、経済的な問題を解決することが非常に難しいと感じた。2つの建物を連携させることは、町家の佇まいを残しつつ、機能性や経済面の問題を解決する一つ的手段として有効ではないかと考える。



EDplace91号 卒業制作特集 作品募集



過去のEDplace卒業制作特集ページの例
レイアウトの参考にご覧下さい

毎年、好評をいただいております、EDplace卒業制作特集号に掲載の学生作品の推薦を募集致します。学生のみさんの励みにも繋がり、就職活動等にも好印象になると評価を頂いております。ぜひ、ご参加頂きますよう、よろしくお願い致します。

ご推薦いただける方は、
★エントリー及び作品のデータを
2020年3月8日（月）までに
EDplace 編集員メールアドレス
yamauchi-t@g.kyobi.ac.jp 山内貴博宛
合わせて、 edplace01@gmail.comにお送
りください。

卒業制作特集 推薦にあたって

- ・1専攻につき、1名の推薦です。大学院は別の1名です。
- ・A4サイズ1/2（例年通り、EDplace 1ページに2校）
文字数は400～600文字
写真枚数1から3程度
写真の大きさや、文字数により、異なります。適宜、考慮の上ご応募ください。
- ・カラー掲載です。
- ・データは写真JPGと文章はWORDで、1mb以下のZIP圧縮でお送りください。

事務局より

環境デザイン部会編集のデザイン学会特集号第28巻2号（通巻104号）「人口減少時代の環境デザインを考える 令和のデザインサーヴェイ」が、2020年11月に発行されました。すでに皆さまのお手元に届いていることかと思えます。編集をご担当いただきました森山貴之先生、山本早里先生、お疲れ様でした。（事務局：平松早苗）

EDplace90 編集後記

今回は前号に引き続き、『コロナ禍にて』で部会員のみなさまに投稿を募りました。伊藤氏の大学の地域性のこれから、田崎氏のコロナ禍における卒業制作展について、加藤氏のコロナ渦中の日常、大倉氏の「デザインの核を知る」講座について、ご投稿いただいたみなさまの多様な立場での多様な視点や取り組みを知ることができたのではないのでしょうか。また、山田弘和氏より『「新しい生活様式」と環境デザインについて』のアンケートを前号に掲載してみなさまにご協力いただき、早速今号で集計報告を寄せていただきました。P.9の「デザインの役割について」山田氏が言われる「次の環境デザインと、社会に必要なデザインが向かうべき視点となる指摘」をみなさまと共有して、コロナ禍の現状と感染拡大防止においての問題や課題を環境デザインの視点からどのように考えていけるのか、みなさまと議論し合いたい気持ちに駆られます。近

いうちにぜひそのような場が作れたら良いですね。

また、EDplaceでは学生さんたちに研究や課題に取り組んだ成果を発表できる場として『学生研究ノート』を設けています。今回は、京都美術工芸大学の大学院生2名の「祇園祭山鉾町の会所建築をめぐる現代的課題のリサーチと再生計画案」のご紹介。古いシステムを現代から未来にかけてどのように存続させていくのか、興味深い提案ではないでしょうか。部会員のみなさまからもご意見などお聞かせいただけると、さらに提案が深まるように思いました。『学生研究ノート』は随時投稿を受付けていますので、ぜひご活用ください！【90号担当】。

EDplace